祇園小唄

作詞　長田幹彦（明和三年　祇園名妓「きくうた」に）
作曲　佐々紅華　唄　藤本二三吉　三味線　佐藤　さくら子

（二上り）

月は朧に東山　霞む夜毎の篝火に
夢もいとうた　紅桜　思ひ出深い　祇園小唄

祇園恋しや　だらりの帯よ

夏は河原の夕涼み　白い浴衣に　提灯の
恋か　灯籠　流しの　紅も　燃えて身を焼く　火文字

祇園恋しや　だらりの帯よ

鴨の河原の水飛沫　唄に瀬音に　秘密の声
祇園恋しや　だらりの帯よ

祇園恋しや　だらりの帯よ

祇園恋しや　だらりの帯よ

祇園恋しや　だらりの帯よ

祇園恋しや　だらりの帯よ

祇園恋しや　だらりの帯よ

※「きくうた」に残る原文では「夢に浮名の川千鳥」とある

祇園小唄（現代語訳）

（一）
春の月が東山ほぼかや浮かんで出ているわ。
夜になると、毎夜　鴨川に焚かれる篝火が　水面に霞んで見えてくる。
夢に出てくる紅桜（祇園の芸妓）の姿が、幽玄の中　一面に咲きます。まるでありたての夢のよう。
離れて暮らす今　あなたを思ひ出すわ。胸を解くんで　どうしてこうも思いを振り切れないわ。
あ、祇園の舞妓は　悲しいあなたを思って　だらりの帯を締らすのね。

（二）
夏になり、鴨川の河原に出ようと涼やかでしています。もうあれから何年経ったかしら。
紅をもって引いて、切なくて涙が出ること、あなたへの恋い慕しいこと。
私の体は　あの文字焼のように焦えているわ。
あ、祇園の舞妓は　悲しいあなたを思って　だらりの帯を締らすのね。

（三）
秋が深まる頃、河原に佇む私たちは　水飛れの鴨のように恋に酔せて、
瀬音は唄いてよったが　叫びたくなるような　おまの鐘が聞こえてきます。
白川沿いの　柳の葉先は　葉を落として　秋風が吹いています。
もう絶えるかって　あなたのことを忘れないようにって、　誓ひとう。今夜も一晩中泣いているわ。
あ、祇園の舞妓は悲しいあなたを思って　だらり帯を締らすのね。

（四）
冬は　べた雪になって　しんしんと冷雪に積もってます。
積る恋ので何度を重ねたお逢い。今夜は二人きりなれて嬉しいわ。
部屋の灯りは、夜が明けるまでと　愛しいさかい。
枕を共にして　つがいの川千鳥のように　愛しいさかい。
あ、祇園の舞妓は　悲しいあなたを思って　だらり帯を締らすのね。

令和二年六月十五日　大中臣　正比呂　抜訳

【解説】　令和二年六月十五日　日本和想小説家クラブ会員　大中臣正比呂

昨年（2020年）七月八日後、京都市東山花見小路四条下ル　の又東で、お茶屋（きくうた）は廃業で焼失し、赤松さん（藤本二三吉）は廃業。

「祇園小唄」は、彼が東京からすぐ渡びに来たの初作詞家　長田幹彦が作詞した　祇園小唄（1920年）に　彼の　恋人　藤本二三吉が　歌唱力をもって　ビクターから世に出た。今もなお人々に歌い続けられている　東京で作られた京都の唄である。

「夏も涼しい　紅桜　思ひ出深い　祇園小唄」　の　歌詞　の　紅桜　は　祇園　の　芸妓　の　姿　を　表　し　ま　す　。　そ　の　様　子　は　紅　を　付　け　ま　す　か　ら　、　と　て　も　美　し　い　と　の　ま　ま　。　ま　た　、　紅　は　、　お　茶　を　引　き　ま　す　か　ら　、　お　茶